

## 「津久井やまゆり園事件を考える」1・26 神奈川集会

神奈川頸髄損傷者連絡会 副会長 矢野 公代（当日共同司会）



祭壇は亡くなられた19名の方の命を悼み、19種類の花とキャンドルで飾られた。

津久井やまゆり園の事件が起きて、46名の障がい者が殺傷されてから早半年、あの山の中の同じ場所・同じ規模での「やまゆり園」の建て替え話しが起こり、入所者の意見を取り入れるといいながら十分な意見も聞かないまま話が進み、地域で暮らしたいと思う障がい者や、自分たちがいつでも訪ねられる近くの施設で暮らしてほしいと願う親・兄弟など300名の参加を得て1月26日に横浜の県民センターで集会が行われた。神奈川自立生活支援センターの鈴木治郎氏の挨拶のあと参加者全員で黙とうを捧げた。



会場黙とう

### 各氏講演

基調講演では、河東田博氏（入所施設勤務を経てスウェーデンで脱施設化について研究）が「施設に入りたくて入っている人はいない。今回の事件は管理体制の中での障がい者は不幸とだいう思い込みであり、障がい者はいなくていい厄介者という優生思想にもとづく差別意識は私達の中にもあるのではないか。県は建て替えに80億、（国は全国の違法侵入者への予防対策に118億）を計上したが、それでこのような侵入事件を防げるだろうか。今回の建替えて何十億と使うなら、それで地域と触れ合う人間らしい生活を作ることできる。」と話された。



河東田博氏

大熊由紀子氏（もと朝日新聞の論説員、福祉と医療・現場と政策をつなぐ「えにしネット」で活躍）も「事件の後に作られた『共に生きる社会かながわ憲章』にも沿っていない」と、ノーマライゼーションを目標に実践している各施設を紹介しながら、「どんなに重度でも人は街の中の普通の家で住み、普通の暮らしを享受する権利があり、社会はその権利を実現する責任があるということをおぼわすのを忘れていないか。」と指摘した。

山田優氏（長野で西駒郷という知的大型施設を改革）は、様々な調査をしていく中で施設に入る人は本人の意思ではなく、しかたなく来ているケースが多いことを知り、まず当事者たちに詫言した。そして本人の思いを聞くことから始めた。幼い頃から人生を否定されてきた人で自分の意見をすぐには言える人はいない。

何度も何度も、期間をおいて本心を聞き取り、家族の意向も聞きながら調整した。地域のグループホームや自宅に戻る方もいて、14年かけて500人いた人も現在102人になっている。現在地域移行した人を訪ねるサポートもしている。大変だがやれないことはない。と、語った。



写真 左・大熊由紀子氏 右・山田優氏

施設ではなく親の近くや地域で暮らしている、家族や当事者達からの発表があった。

最後に、アピール文「入所者の希望を丁寧に聞き取り、共に生きる神奈川に・・・」を採択した。

集会後、県へアピール文の提出行動を行い、代表団を待つ間、県庁前で見形信子さんと共に「19の軌跡」の歌を唄い、シュプレヒコールを行った。そして代表団が帰って来たのは日が落ちた頃だった。



神奈川県庁前行動

#### その後の経過

翌27日、黒岩知事はやまゆり園の基本構想のとりまとめを延期。この為の部会を設け専門家8名で家族会・政令市・障がい者団体などから意見を聞き、6月に構想案をまとめる。今回は園の取り壊しのみで、基本設計費は次回に見送られる。知事は地域に開かれた施設という素案を基に、施設の規模や地域の生活に移行しやすい環境づくりを進めていくという方向を示した。

2月2日、「横浜知的障害関連施設協議会」の高山会長は「横浜にはグループホームが600カ所程あり重度の方も暮らしています。横浜に安心して戻ってきて下さい。私達は希望する方が横浜で暮らせるようにグループホームの受け入れと、日中生活の場を提供し、希望される暮らしができるよう尽力します。」と表明すると同時に、県の努力を要請した。

※写真は DPI 日本会議提供